

# パキスタンの食料・農業とインダス川・インダス文明

理事研究員 清水徹朗

## 1 人口が2億人を超えたパキスタン

多くの日本人にとってパキスタンはなじみの薄い国であり、パキスタンを訪問する日本人は少ない。仏教や日本語の起源(タミル語説)への関心からインドに強い関心を持ち続けてきた私も、パキスタンのことはあまりよく知らなかったが、コロナ禍の前に訪問する機会があり、パキスタンに対する認識を新たにしました。

私が特に驚いたのは、パキスタンの人口が既に2億人を超えていることであった。アジアではインドネシア(2億7千万人)に次ぐ第4位(世界でも5位)の人口大国であり、パキスタンがこの巨大な人口をどう養っているのかを知りたくなった。

## 2 インダス川とインダス文明

「パキスタン」という国は、第二次世界大戦後にインドとともにイギリスから独立し、ヒンズー教徒が大多数のインドとは別れてイスラム教徒中心の国家として出発したが、1971年に東パキスタンが「バングラデシュ」として分離独立して今日の姿になった。

面積は80万km<sup>2</sup>(日本の2.1倍)で、東部に砂漠があり最北部は山岳地帯である。国土のほぼ中央を南北にインダス川が流れており、パキスタンにとってインダス川は生命線とも言うべき重要な河川である。

そのインダス川流域に栄えたのがインダス文明であり、古代遺跡モヘンジョダロ、ハラッパーはインダス川沿いに位置する。しかし、紀元前15世紀に西方イランからアーリア人がやってきて、インダス文明は滅亡した。紀元前4世紀にはアレキサンダー大王の遠征があり、その後も中央アジアや西方から新しい勢

力が度々進出した。一方、北部ガンダーラ地方では大乘仏教が盛んになり、仏像や仏典がシルクロードを通じて日本まで伝わった。

## 3 パキスタンの経済と農業

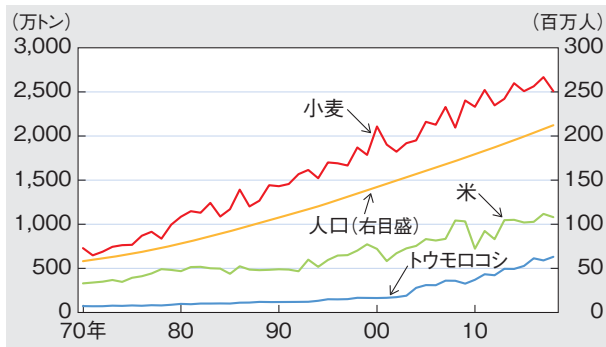
パキスタンは、独立当初は工業基盤が乏しくイギリス植民地時代の負の遺産も抱えていたため厳しい経済運営が続いたが、60年代より徐々に工業化が進展し、また「緑の革命」と灌漑によって農業生産量が増大した。

しかし、北部カシミールを巡ってインドと3度の戦争(印パ戦争)を行うなど軍事費負担が大きく、必要なインフラ投資や教育支出に比べ十分な税収は得られず、貿易赤字も続いた。特に、石油資源が乏しいパキスタンはオイルショック(73年)の影響を強く受けて債務危機に陥り、80年代にIMFの構造調整プログラムを受け入れた。

さらに、隣国アフガニスタンへのソ連侵攻(79年)やNY同時多発テロ(2001年)等の影響もあり厳しい状況が続いたが、近年は出稼ぎ労働者(中東等)の送金収入や治安の改善も寄与し4～5%の成長率を続けている。一人当たりGDP(17年)は1,534ドルでインド(1,923ドル)より低いものの、近年人口増加率も低下し国民の生活水準は向上しつつある。しかし、経済に占める農業の割合が高く(GDP24.6%、労働力40.5%)、地主制が残っていることもあり、農村部を中心に貧困層が多く存在している。

パキスタンの農地面積は3,630万haで国土の45%を占め、日本の農地面積の8.2倍と広い。主な農作物は、小麦(880万ha)、米(281万ha)、綿花(237万ha)、トウモロコシ(132万ha)、サトウキビ(110万ha)である。また畜産も盛んで、

第1図 パキスタンの穀物生産量推移



資料 FAOSTAT

牛46百万頭(日本の12倍)、ヤギ74百万頭、羊30百万頭を飼育し、牛乳(水牛を含む)の生産量(4,483万トン)は日本の6倍である。

#### 4 食料需給の動向

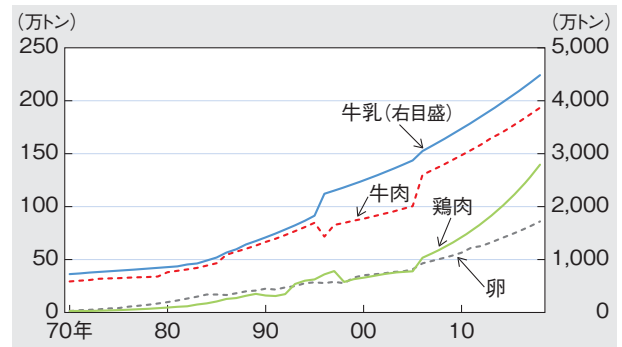
2018年におけるパキスタンの穀物生産量は4,274万トン(日本の3.9倍)であり、うち小麦2,508万トン、米1,080万トン、トウモロコシ641万トンである。穀物生産量は20年前(98年)の1.5倍になっており、特に近年ではトウモロコシの生産増加が目立っている(第1図)。この間、農地面積は増えておらず、生産増は主に単収の増加(品種改良等)によるものである。パキスタンは10年ほど前まで不足時に小麦の輸入を行っていたが、現在では穀物の完全自給を達成しており、18年には米(精米ベース)を383万トン輸出するなど穀物輸出国になっている。

パキスタンでは油脂として主に綿実油を使用しており、大豆やパーム油も輸入している。野菜の生産量(546万トン)は日本の6割であるが、果実(マンゴー、オレンジ等)の生産量(722万トン)は日本の2.2倍である。

さらに、畜産物の生産量は、牛肉193万トン(20年前比2.3倍)、鶏肉140万トン(4.8倍)、ヤギ・羊肉52万トン(1.2倍)、卵86万トン(3.1倍)と大きく増加しており、牛乳の生産量は20年前の1.9倍になっている(第2図)。

このように、パキスタンは巨大な人口を抱えているにもかかわらず、食料自給を達成し、国民の栄養水準は改善していることがうかが

第2図 パキスタンの畜産物生産量推移



資料 FAOSTAT

える。

#### 5 国際環境の変化と中国への接近

パキスタンはインドと中東の間に位置し、西はアフガニスタン、イランに接し、北は中国に接している。そのためパキスタンは、これまでアフガニスタンや中東の紛争の影響を受け、国内的にも激しい政治対立を経験してきた。また、カシミールを巡るインドとの対立は現在も続いており、その背後には民族・宗教問題に加えてインダス川の水資源問題がある。

こうしたなかで、近年パキスタンに対する中国の影響力が強まっている。既に北部では中国の資金と技術による高速道路が完成し、今後この高速道路はパキスタン南部のグワダル港まで通ずる予定であり、鉄道建設も計画されている(「中国パキスタン経済回廊」)。中国にとっては新疆ウイグル自治区(カシュガル)から中東、アフリカに通じる物流ルートを確保することになり、「一帯一路」構想の基幹的事業として重視している。

パキスタンには日本車があふれており、人々は親日的である。人口に占める若者の割合は非常に高く、彼らは日本に強い関心を抱いており、我々との交流でも目を輝かせていた。今回の訪問で、南アジアにおけるパキスタンの重要性を認識し、日本はパキスタンとの関係を強化する必要があると強く感じた。

(しみず てつろう)